

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第882号 平成27年2月17日

死んだら対応する？

我が子のいじめに関して相談に訪れた保護者に対して、校長が「生徒が死んだら対応する」という趣旨の発言をしたという新聞報道には、思わず我が目を疑いました。悪い冗談かと思いましたが、どうも事実のようです。

校長から「生徒が死んだら対応する」といわれた保護者の心中を思えば、配慮が足りないといった程度の言葉では表現できない怒りを禁じ得ません。

報道によると、一昨年（2013年）7月、守口市立中学校の男性校長が、同級生からいじめを受けた男子生徒の母親から、加害者側との話し合いなどに同席してほしかったと不満を示された際「（生徒が）死んだら出る」と答えていたというものです。しかも、市の教委はこの校長に対して不適切として口頭注意したものの、その事実は公表していませんでした（1月17日付北海道新聞から）。

母親が校長に対して、「死んだら終わり」ではないかと抗議しても、校長は「校長は生徒が死ぬなど重大事件のときに表に出るものだ」と話したといえます。

産経新聞の報道では、校長は取材に対して「最初から陣頭指揮をとることはなく、自分が入るのは重大事案のときだと伝えたかったが、被害者側にショックを与えてしまい、軽率だった」と話しているとの事ですが、言葉を選べない校長は校長として非常に問題だと思います。

何でもかんでも直ぐに管理職が矢面に立たなければならないというのでは、組織が組織として機能していないという事でもあり問題ですが、校長としては状況を把握して適宜適切に対応すべきであり、「生徒が死んだら対応する」というのは言語道断といわざるを得ません。

校長は「最初から陣頭指揮をとることはない」といっていますが、校長のいじめ問題に対する認識の甘さを指摘して置きたいと思います。いじめ問題が発生した時は、直ちに学校全体で対策を講ずべきで、そのためにも校長は校内の動きや対応状況の把握に努め、必要な指示、指導をしなければなりません。少なくとも、いじめの被害生徒が自殺するというような最悪の事態を避けなければならず、そのためにあらゆる努力を払う責任が、校長にはあるはずで。

「生徒が死んだら対応する」という校長の発言は、「その位校長は偉いのだ」といいたかったのかもしれませんが、しかし、そうした発言が校長という職に対する権威を貶め、信頼を傷付けてしまうだろうという事に気が回らないとしたら、そう発言した校長の適格性を疑う前に、人として如何なものだろうかと私は思います。

また、守口市教育委員会は、問題発言をした校長に対する処分（口頭注意）を公表していません。そもそも、今回の問題は口頭注意といった程度のものかという思いはありますが、何より教育委員会の姿勢に強く感じるのは、事実を隠す事で事を表ざたにせず穏便に済ませようとしたのではないかという事です。それ以上に私は、事実を隠す事で事実上校長を守ろうとしたのではないかと疑ってしまいます。

教育委員会が守るべきは、子ども達の命であり、校長の名前でも、外聞でもありません。（塾頭：吉田 洋一）